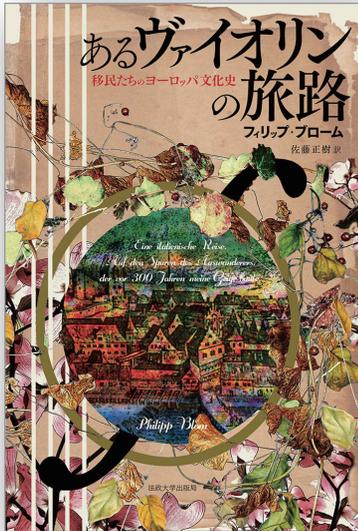


新収蔵資料抄



最寄り図書館に取り寄せ可

あるヴァイオリンの旅路 移民たちのヨーロッパ文化史

フィリップ・ブローム／著 佐藤 正樹／訳 法政大学出版局 2021.2 発行
本文 357p 19cm 763.42 / ネ 12 2021.4.23 受入 3400 円＋税

目次

一挺のヴァイオリン	XII 訛り	XXIV フェティシズムについて
I 出会い	XIII つながり	XXV 鋳掛屋横町
II リュートのへぎ板	XIV ある種の弓形	XXVI バッサーノ
III デン・ハーグ	XV パリ、挫折を乗り越えて	XXVII お気に召すまま
IV 解説	XVI ヴェネツィア	謝辞
V 亡霊のひしめく町	XVII ヘラクレスとその棍棒	訳注
VI 死の舞踏	XVIII 父親探し	訳者あとがき
VII ごつごつした石の世界	XIX 指標	文献・図版一覧 (9p)
VIII ミラノ	XX ある工房	
IX 六つの独奏曲	XXI 魂柱の亀裂	
X ロンドン	XXII 曲がりくねった小道	
XI 山師	XXIII 顔の手がかり	

資料概要

かつて音楽家を志していた著者のブロームは、カルロ・ジュゼッペ・テストレーの偽ラベルが貼られた一挺のヴァイオリン手に入れた。本書は、著者によるその楽器来歴探訪の記録であり、同時に中近世ヨーロッパ文化史が語られる歴史書である。訳者が松本清張の『或る「小倉日記伝」』を想起したように、あるいは筆者が「まるで探偵か刑事が（略）行う地道な捜査の記録のよう」というように、ミステリー、良質の物語として読むこともできる。

アマーティー式の曲線、下地やワニスはイタリアのものでありながら、「ドイツの訛りがある」というヴァイオリン。ブロームは、それを作った職人を知りたいという熱情にかられ、その未知の職人を仮に「ハンス」と名付け、楽器職人や鑑定人を訪ね、資料を漁ることになる。

ハンスの探求では、ヴァイオリンの歴史や様式、同時期の音楽や音楽家と楽器製造、中近世のヨーロッパにおける人々の移動や経済活動、当時隆盛を極めたヴェネツィアや、ドイツの地方都市フュッセンの諸相と人々の暮らしや信仰がひもとかれる。楽器組合の名簿、納税記録、裁判記録などの古文書が調べられる。マッテオ・ゴフリラー、アントニ・ポシュ、ミケーレ・ドウコネ…。ハンスの候補者は現れては消えていく。

当時の紀行文をはじめ、手記、文学など、さまざまな書物の記述も踏まえて本書で描かれるのは、一人の（同時に、当時数多くいた）フュッセン出身の楽器職人の人

生でもある。

果たして、ブロームは最後にある職人にたどり着く。今日まで残っている楽器は一つもないというそのヴァイオリン職人が、ハンスその人なのだろうか？

本書は、現在日本語で読めるブロームの唯一の作品という。装画・装丁の美しさと合わせ、今回、この魅力的な書物を本邦に紹介された関係各位に感謝したい。

著者紹介

フィリップ・ブローム (Philipp Blom) 1970年、ハンブルク生まれ。博士(歴史学)。歴史家、作家、ジャーナリスト。グライム文学賞受賞などベストセラー作家でもある。著書に『手に入れることと死蔵すること 蒐集家と蒐集の秘史』(2002年)、『世界を啓蒙する 百科全書、歴史の流れを変えた本』(2005年)、『立ちくらむ歳月 西欧の変動と文化 1900-1914年』(2008年)、『邪悪な哲学者 パリのサロンと啓蒙主義の忘れられた遺産』(2011年)など。

佐藤正樹 (さとうまさき) 1950年、愛知県生まれ。名古屋大学大学院文学研究科修士課程修了。広島大学名誉教授。博士(文学)。ドイツ文学・文化史。訳書に、ブルクナー編『ある子殺しの女の記録』(人文書院、1990年)、ファン・デュルメン『近世の文化と日常生活』(1993～1998年、鳥影社)、コンゼンツィウス編『大皇帝侯軍医にして王室理髪師ヨーハン・ディーツ親方自伝』(2001年、白水社)、ボラージオ『死ぬとはどのようなことか』(2015年、みすず書房)など。

本紙は、県立図書館が新たに所蔵した資料(図書資料・視聴覚資料)から、ぜひご利用いただきたいものを厳選してご紹介するものです。これらの資料は、禁帯出資料を除き、最寄りの図書館に取り寄せできます。

なお、本紙の内容はWebにも掲載しています。ご覧の際は右のQRコードをご利用ください。

また、内容の誤り等、お気づきの点があればお知らせくださるようお願いいたします。

